慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ホランド・ロオズ著「古代の地中海」: J. Holland Rose: The Mediterranean in the Ancient World. 1933
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.6 (1933. 6) ,p.847(65)- 852(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19330601-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ホランド・ロオズ著「古代の地中海」

——J. Holland Rose: The Mediterranean in the Ancient World. 1933.——

高村象平

茲に紹介するロオズの新著 The Mediterranean in the Ancient World. 1933. の取扱ふところは、著者自ら語るところに據れば、古代人の地中海制覇に際して彼等が享受した樣々の自然的利益を擧げることと、原始人の獨木舟からアレクザンドリアの穀物船に至る船舶發達史上の顯著なる諸事實を指示することとである。而して本書を一讀して直ちに氣付くことは、素と本書の大半は古代後期に始まる謂ゆる「內海文明」成立過程、殊に羅馬の地中海に於ける制海權掌握に至る經緯とその諸影響とにあてられて居るのであるが、この場合、ヘレスポント及びメッシナの二海峽支配の重要さに、特に著者がその重點を置いたことである。即ち著者は、羅馬の世界制覇は、この帝國が右の重要地點を確保したことに基くと做す。そして羅馬が政治上にその覇權を獲得した後に於いても、その海外よりの穀物供給が海賊によつて脅かされること無きやうに、地中海に對して斷えざる關心を持ち又倦むなき努力をこれに對して拂つたことは、茲に文明進歩上に多大な影響を與へる所以となつたと云ふ。要するに羅馬の大を成したもの、又それのあらゆる方面に於ける影響の執れも、一にその海上支配確保に基くことを力說することが、本書に於ける著者の意圖であると云へよう。そして又、「文明の進歩は樣々の民族及び地方の發明や產物の自由交易に依る

こと甚だ大であるが、この交換は海によつて最もよく行はれ得る」ことを、著者は常に念頭に置いてゐることも、附言して置かう。

本書の最初の章には、航海の發達を助成するに與つて力あつた地中海の地形、潮流、沿岸に於ける天産物の所在等が指摘される。地中海東部に於いて古代人をしてこの内海に活動することを餘儀なくせしめ、更にこれを誘つたものは、ロオズに據れば次の如き條件、即ち（一）沿岸地方の比較的不毛なること、（二）この内海に魚類の棲息すること多きこと、（三）潮流の激しからざること（殊に四月より十月にかけて海上平穩なることは橈漕を發達せしめた。）（四）盛夏時の西北風とシリア沿岸の北方潮流とによつて、希臘よりクリィト及びエヂプトに至り、更にシリア、サイプラスを經てスポラデスに歸る三角航海が好都合であつたこと、（五）この地方に於いて造船用木材の供給が豐富であるに反して、貴金屬、錫、鐵の産出が比較的乏しい爲め、裝身具、農耕具、武器の製作を欲して、タスカニイ、西班牙北西部、コォンウォル等の遠隔地に航海し貿易する誘因が形成せられ、從つてまた航海術の發達を促したこと、これである。（p. 11.）この最後に掲げた狀態に就いて云へば、サイドン及びタイアの近くにレバノン山脈の存在すること、そして大木伐採術とこれを使用しての造船技術に優れて居たこととは、フェニシア人の海上制覇を可能ならしめた一因であるが、このことはその後タイア及びサイドンの衰退が、近隣諸侯の背面地領有によりレバノン山脈及びヘルモン山から木材を伐出すことが困難となつたことに基くことを物語り、更に又、カルセェジの海權の崩壞を以て、シシリイ、サルディニア、コルシアの喪失により造船材を確保する途の閉されたことに結果するものと云ふことが出來ないであらうかと、著者は暗示して居る。（p. 20, 23.）次いで著者は、有史時代に入つて航海業に從事した二主要民族たる希臘人及びフェニシア人の葛藤を描き、このことの起つたのは、初期の海上貿易狀態からして、更にフェニシア人が遠隔地に交通した商賈であり且つ東洋と西洋との殆ど唯一の仲介者であつたことからして、當然の結果であると云ふ。何となれば、希臘は、ガデス、地中海西部、黑海に至るフェニシアの貿易路内に位置し、その國土の瘠薄の爲めエィジァン海諸島との交易に依倚して居たのであるから。しかもこの兩者の衝突は、自由貿易的沿海貿易組織と、獨占的遠隔地貿易組織との對立と見られ、その抗爭は、希臘がその植民地をフェニシアの保全せるシシリイや南伊太利扨ては南方リビアに擴張するに伴ひ、層一層激化した。そして茲に於いても黑海に通ずる諸海峽、特にボスポラスとヘレスポントの支配權を確保した希臘が、黑海貿易を制握し得たのであり、またその後希臘人の内爭に乘じたフェニシアの誘導による波斯の歐羅巴侵入も、右の海峽の巧みなる利用に基因してこれを阻止することが出來たし、このサラミスその他に於ける希臘の勝利は更にその後アレクザンダア大王によるフェニシア海權の壞滅に導く端緒となつたのである。（pp. 54, 65-6.）

波斯に對する輝かしき勝利の後、地中海東部支配上好個の位置を占める希臘が、海上の優越を長きに亙つて保持することを得なかつた理由付けは、本書第三章に於いて求められる。その解答として擧げられるものは、希臘人が餘りに黨族的であり、一國民としての團結が容易でなかつたことである。そしてその政治的領域に於いて小兒の域を脱するを得なかつた希臘に次いで、地中海の支配權を確保するに至つた羅馬の勃興の原因は樣々擧げられるのであるが、著者は、その中から地中海に於ける戰略的中心地たるシシリイの獲得なる要素を摘出する。この島はその包藏する資源の點から、また地中海の腰部を扼する位置に在ることからして、常に地中海諸民族の爭奪の目標とされて來た。後者に就いて云へば、このシシリイとこれから百哩とは隔らぬ對岸の亞弗利加北部とを占有する場合には、地中海全體の支配權獲得を結果するし、更に古代に於いてこの内海を支配することは當時知られて居た全世界

の支配を意味した。(p. 77.) フェニシア人が北亞弗利加にユティカとカルセェジの二植民地を建設したのは、この理由に出づるものであつた。しかもカルセェジ人はその掌中に制海權を把持して居た時に於いて、シシリイの西部のみを保持し、北東部殊にメッシナ海峽は希臘人の占めるにまかせて居た。然るにこの海峽は、シシリイとボン岬との間の海上權制握に劣らざる戰術上の重要地點なのである。ここに謂ゆるポエニ戰爭に於けるカルセェジの敗北の一因は胚胎し、それは又カルセェジ人のシシリイ放棄の契機を爲し、更にはハンニバルの失脚の原因たるものであつたと云はねばならない。(p. 79, 96-7.)。

第四章及び第五章は、地中海西部及び東部に於ける羅馬の制覇を取扱ふ。羅馬がその國境をゴオル人に脅かされた場合は北西部地方へ、カルセェジ、イリリア地方の海賊、マケドニア、シリア、ポンタスに脅かされた時は南方及び東方のそれぞれの地方へ、その兵を向けたが、同時にこれ等の擴張は海上貿易の增大を伴ひ、またこの後者は各地に於ける無秩序を終息せしむることを帝國に要求し、茲に於いてその履行は遂に羅馬をして地中海沿岸の全部を領有せしめるに至つたと著者は說く。(p. 101.)。そしてカルセェジを征服すると共に、後者の植民地はすべてその有に歸し、茲に羅馬の海權と羅馬法とは地中海に面する各地を統一せしめるに至つた。それは政治的統一に始まり文化的統一に進んだ。よく語られる如く羅馬道路は羅馬文明を進展せしむるに與つて力あつたが、更に羅馬艦隊の影響も決して忽にするべからざるものと云はねばならない。(p. 119-20.)。換言すれば、羅馬帝國をして事實上の地中海帝國たらしめたものは、その海外よりの食糧供給を確保する爲めに保持せざるを得なかつた海軍力の確立であり、しかもこの海軍による支配行使の奏功こそ、羅馬が他の如何なる國民にも優つて長期に互りその海權を把持し續けた主因なのであると、著者は云ふ。(p. 146.) 勿論羅馬帝國の存續した理由としては、この他に、(一) 羅馬人の性格（數世紀の間農耕に從事したが爲めに着實さと耐久力とを具へ、この點に於いて敵對諸民族に遙かに優つて居た。）、(二) 國土の基礎の强大（この自然富源の强大の爲めに艦隊を維持し又數代に互つて擢手を訓練することが出來た。）、(三) 木材及び金屬に對する支配（造船材料の豐富とその保持とである。）等が擧げられるけれど (pp. 147-50.)。

「地中海帝國とその影響」と題する最後の章に於いて、ロオズは云ふ、「羅馬人は商業民族ではなく、彼等は交易を賤しみこれを希臘人や東邦人に委ねた。從て當時の史家は經濟史を取扱ふことはその威嚴を損するものと做し、この點に於いて彼等の勞作は皮相的研究たるの誹を免れない」と。素よりロオズが經濟史を如何に解するかは詳かでないが故に、この問題に立ち入ることは、本稿に於いては差控へよう。扨て、羅馬の地中海帝國結成の結果は、一言にして云ふならば平和と秩序と物質的安慰とを齎したことであり、この羅馬の統治と文明との促進に際して地中海の演じた役割はどれほど說いても强調し過ぎることはないとロオズは主張する。しかもこの海權掌握の影響を見るならば、それは沿海諸民族を同化するに役立つたと云ふことが出來る。と云ふのは、それは通商を助長し、この通商は風習の異る他所者を統合せしめるに至つたから、即ち羅馬帝國なる坩堝の中に於いてこの後者はその個別性を喪失したのであつた。しかもこの他面に於いて羅馬帝國の平和の繼續は謂はゞ麻痺的單調さを齎らした。この謂ゆる羅馬化、物質化の一例として、著者はエヂプトに於ける繁榮とその半面に於ける該地の生活の機械化とを擧げて居る。(pp. 157-160.) 然じ地中海が東西兩洋を連繫せしめ、兩者に於ける產物と思想との交換を刺戟した功績は忘却すべからざるところに屬する。まさに The sea is the most potent mixer, whether of peoples, products or thoughts. (p. 28.) である。例へばこの帝國內に於ける基督教の急速なる傳播は、地中海の存在とその海上交易と

に起因すると云はねばならないのである。（p. 164.）斯くてこの交易こそ人類の生活水準を物的にも神的にも高めるに與つて力ありしものとロオズは結ぶ。（p. 176.）

大略以上の構想を持つ本書に對して、その特徴を本稿の初めに掲げて置いたからには、茲に評言を加へる要を見ないであらう。謂ゆる内海文明に關する簡單な參考書の一として擧げらるべき價値を本書が有することは確かであると云はねばならない。

リカアドオ著作及び手稿の發見

小泉信三

Minor Papers on the Currency Question 1809-1823. By David Ricardo. Edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander. Baltimore the Johns Hopkins Press. 1932. pp. IX, 231.

久しく埋沒を悔まれてゐたリカアドオの「マルサス經濟原論評註」の原稿が發見せられ、公刊せられて學者の多年の渴望を滿たしたのは數年前の事であつたが、（Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" By David Ricardo. Edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander and T. E. Gregory, 1923）、今又同じホランダア氏に依て、同じリカアドオ文書から上記の書が校訂編纂せられたことはリカアドオ研究者に取つて慶賀すべき出來事である。リカアドオ文書發見の顚末は、前記マルサス評註の緒論に記されてゐるが其を見てない讀者の爲めに念の爲め記せば、此文書は「テヂッド・リカアドオの曾孫で、今英國ハンプシヤア州のクライストチヤアチに住むフランク・リカアドオ（Frank Ricardo of Bure Homage, Christchurch, Hants.）が偶然其物置に發見して之をホランダアの手に附したものである。其のホ氏宛書簡の一節を轉載すれば左の通りである。

「一九一九年の秋――或は春なりしやも知れず――なりしと覺ゆ、予はブロオムスベロウ（Bromesberrow）の宅の物置